

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 9 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22510289

研究課題名（和文）

「乳」からみた近世社会の女の身体・子どものいのち

研究課題名（英文）The lives of infants and body of women during the Edo Period as seen from a nursing perspective

研究代表者

沢山 美果子 (MIKAKO SAWAYAMA)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・客員研究員

研究者番号：10154155

研究成果の概要（和文）：本研究では、「乳」に焦点をあて、近世社会の人々はどのように母と子のいのちを守ろうとしたのかを考察した。その結果、「乳」の問題は、「家」の維持・存続を願う人々にとっても、人口の再生産をはかる藩にとっても重要な問題であり、「乳」に焦点を当てることで、近世社会の人々はどのように女と子どものいのちを守ろうとしたのか、いのちをめぐる環境に接近できることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this research, I am focusing on nursing in the Edo period to examine how families of the Edo period tried to protect the lives of mothers and infants. As a result, it became clear to me that nursing was crucial both to people who wished to maintain/sustain their family lines (*Ie*) and to clans (*Han*) who wished to reproduce the population. Focusing on nursing provided me an opportunity to view environments that surrounded the life more closely, which shed light on how people in the Edo period tried to protect the lives of mothers and infants.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：身体、いのち、近世、乳、子ども

1. 研究開始当初の背景

(1) 2000年以降、いのちの視座から近世史像の再構築を試みる研究が登場しつつある。その代表的な研究として塚本学『生きることの近世史』（2001年）、倉地克直『徳川社会のゆらぎ』（2008年）がある。これらの研究では、近世の人々のいのちを守る砦としての

「家」の維持・存続といった視点から、近世社会に生きた一人ひとりのいのちの側から歴史を描く試みがなされつつある。本研究も、これらの研究に学び、いのちの視座から、特に、女の身体と子どものいのちに焦点を当て、ジェンダーの視点から、近世史像を再構築することを課題とした。

(2) 近世社会の生殖といのちへの観念やいのちの環境を明らかにする上で、本研究が重要な手がかりとしたのは、女の身体と子どものいのちの結節点にある「乳」の問題である。氏家幹人の『江戸の病』（2009年）は近世社会には「乳縁社会」とでも名付けられるようないのちをめぐるセーフティネットが存在したことを指摘した貴重な研究であるが、用いているのは18世紀の一武家の日記に留まる。そこで本研究では、近世後期、19世紀の農民も含めた分析を課題とした。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、女の身体と子どものいのちの結節点にあり、近世社会にあっては、いのちをつないでいく上で不可欠のものであった「乳」に焦点をあて、「乳」をめぐる人々のネットワークをはじめとする近世社会における女の身体と子どものいのちの環境を具体的に明らかにすることで、「いのちのジェンダー史」を切り拓くことを目的とした。

(2) 近年、いのちの視座から近世史像の再構築を試みる研究が登場しつつある。その代表的なものとして塚本学『生きることの近世史』（平凡社、2001年）、倉地克直『徳川社会のゆらぎ』（小学館、2008年）がある。これらの研究では、近世の人々のいのちを守る砦としての「家」の維持・存続と女性の出産、また家の維持・存続との緊張関係の中での子どものいのちをめぐる選択といった視点から、近世社会に生きた、一人ひとりのいのちの側から歴史を描く試みがなされつつある。本研究の目指すところも、これらの研究に学び、いのちの視座から、特に、女の身体と子どものいのちに焦点をあて、ジェンダーの視点から近世史像を再構築することにある。

(3) 受胎に始まる女の身体の変化や子どものいのちが歴史的にどのように捉えられてきたかという「いのちのジェンダー史」を明らか

にするには、性・生殖の問題と、生殖によって生まれた子どものいのちの問題を一連の過程として扱う必要がある。それは、出産の社会史研究では出産までの問題を、他方、子育ての社会史では産後の問題を扱うといった従来の研究上の分離を克服し、両者をいのちの視点からつなぐ試みでもある。

(4) 本研究では、女の身体と子どものいのちの結節点にある「乳」に焦点をあてることで、一人ひとりの女と子どものいのちへの接近をはかることを目的とした。近世社会に合って女の身体から分泌される乳は、子どもの命を保障する上で不可欠であり、民衆にとってのみならず、人口の再生産をはかる藩にとっても重要な位置を占めていた。藩の出産管理、赤子養育政策や捨て子禁止政策の中では、乳をめぐる処置が重視されている。その背景には、産む性である女性の出産による死亡率の高さや、乳児死亡率の高さといった、女と子どものいのちをめぐる状況があった。乳の問題に焦点を当てることは、これら一人一人の女と子どもの命への接近を可能にする。

(5) また、乳の問題は、武士と農民の生殖パターンの違いを明らかにするうえでも、重要な鍵となる。農民の場合は、授乳することで出生間隔をあける生殖パターンが見られるのに対し、武士の場合は、乳母を雇うことによる頻産という生殖パターンがみられるからである。この背景には、女性が「家」の維持・存続のための重要な労働力であった農民の場合は、母体の回復が重要な課題であったこと、他方、武士の場合は、「家」の存続のために、後継者を得ることが優先されたという「家」をめぐる問題があった。乳に焦点をあてることは、農民と武士の「家」をめぐる問題と、そのための生殖パターンの違いを明らかにすることも目的とするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、「家」の存続が人々にとっても支配層にとっても課題となる中で、子どもを産む女の身体と「家」を連ねていく子どものいのちが着目されていく近世後期を対象に、捨て子禁止政策や出産管理政策の中で残された史料群を主な手がかりに、乳の問題に焦点をあて、女の身体と子どものいのちの問題への接近をはかった。

(2) 近世社会は、人口動態一つとっても一様ではない。そのため、研究代表者が今まで研究対象としてきた東北日本と西南日本、都市と農村、武士と農民の比較が可能となるよう、特に、近世大坂という都市の捨て子史料に焦点をあて、女の身体と子どものいのちへの接近を試みた。

(3) とくに本研究では、近世大坂という大都市の有力町人層である、住友、小林家文書、そして河内国志紀郡太田村(現八尾市丹北)の柏原家文書を手がかりに、階層差や都市と農村の関係にも留意しつつ、具体的な地域と史料に即した分析を試みた。

(4) また、武士と農民、町人との比較のために、山口県文書館所蔵の公儀事諸控のなかの毛利藩邸の捨て子記録も収集し、とくに乳に焦点をあてた分析を試み、武家屋敷と町人の関係も考察しようと試みた。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果の一つは、人々の「生」の根源にある性と生殖の問題を、乳に焦点を当ててとらえ直すことは、近世社会の「いのち」の関係史とその歴史性、さらに人々が性と生殖をめぐる様々な葛藤や矛盾の中でおこなった避妊、墮胎、間引き、捨て子といった多様な選択が持った意味を明らかに出来る見通しが得られた点にある。

(2) 本研究では、近世大坂の捨て子養育の問題について、捨て子発見から貰人確定までの過程で作成された捨て子関係史料を手がかり

に、捨て子の命綱ともいえる乳に焦点を当て、捨てる側と貰う側の関係を分析した結果、「家」と女、子どものいのちをめぐる状況を多様な側面から明らかにし得た。さらに、捨て子養育の問題は、都市内部のみならず、都市と農村の関係を明らかにし得ることがみえてきた点も、大きな成果である。

(3) 乳に焦点を当てて捨て子養育の問題を具体的に追究する中で、捨て子研究の射程、つまり一人ひとりの捨て子養育の問題を明らかにすることは、近世の人々の養育困難の具体相や、「家」の維持・存続のためにおこなった養子をはじめとする様々な選択に接近し得ることも明らかとなった。

(4) とくに、乳は捨て子養育の重要な要としてあったことが明確になった。人々、特に都市下層民にとって母との離別、死別、病気、或は奉公によりもたらされる乳がない状態は、養育困難をもたらすものであったこと、他方、実子を亡くしたものの乳のある人々にとって、乳は捨て子を貰い受ける大きな条件となったことがみえてきた。

(5) さらに、口入屋を通し、「乳沢山有り」として実子を亡くした親たちが捨て子を貰い受けた近世大坂の事例からは、子どものいのちをめぐる状況が浮かび上がってきた。捨て子を貰う動機からは、労働能力と生殖能力という「家」にとっての意味によって価値づけられるという近世社会の「いのち」をめぐる価値観が見て取れる。と同時に、「家」の維持・存続を願ったとしても、当時の高い乳児死亡率の下では、生き延びる子どもの数を予測することは困難ないのちをめぐる状況があり、捨て子養育は、まさに、そうした子どものいのちの脆さを背景に成り立っていた点が明らかとなった。

(6) このように、乳の焦点をあててみていくことは、近世社会の「家」の維持・存続のため

の人々の選択や、「家」の維持・存続の内実をそこに生きた人々の側から、生きる場に即し、いのちを繋ぐ営みとして捉える手がかりとなることが見えてきたことは大きな成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10件)

1、沢山美果子、妊娠、出産を通してみた女・子どものいのちと医療——関藩領内を中心に——、一関市博物館、査読無、『江戸時代の病と医療』2012、78-89

2、沢山美果子、性と生殖からみた近世女性の身体と子どもの「いのち」、『民衆史研究』査読無、81号、2011、23-36

3、沢山美果子、都市と農村の関係からみた近世大坂の捨て子、『文化共生学研究』、査読有、11号、2012 59-81

www.okayama-u.ac.jp/user/hss/up_load.../kyousei07.pdf

4、沢山美果子、乳からみた近世大坂の捨て子の養育、『文化共生学研究』、査読有、10号、2011 159-183

www.okayama-u.ac.jp/user/hss/up_load.../kyousei07.pdf

5、沢山美果子「捨て子はどこに捨てられたか?—19世紀前半における西日本の捨て子—」『日本史学年次別論文集『近世二』2008(平成20年版)』学術文献刊行会編、査読有、2010、618-626

6、沢山美果子「歴史における性・生殖・身体」『日本史学年次別論文集『日本史学一般』2007(平成19年版)』学術文献刊行会編、査読有、2010、573-579

〔学会発表〕(計 8件)

1、沢山美果子、赤子と母のいのちを守るための江戸時代の民間療法、国立民族学博物館公開国際シンポジウム「ヒーリング・オルタナティブスーケアと養生の文化」、2012年11月11日、国立民族学博物館

2、沢山美果子、妊娠、出産を通してみた女・子どものいのちと医療——関藩領内を中心に——、一関市博物館第19回企画展、建部清庵生誕300年 江戸時代の病と医療、シンポジウム「つながる命～江戸時代の人々はどのように病と闘ったのか」2012年10月14日、一関市役所

3、沢山美果子、乳からみた近世社会の胎児・赤子のいのち、生物学史研究会(日本科学史学会生物学史分科会・主催)「いのちの歴史学にむけて—胎児・赤子・捨て子のいのちの近世と現代—」、2012年8月4日、東京大学駒場キャンパス

4、沢山美果子、性と生殖からみた近世女性

の身体と子どものいのち、民衆史研究会50周年シンポジウム「民衆史研究の現在」、2010年12月11日 早稲田大学

5、沢山美果子、江戸時代の捨て子養育と子どものいのち—歴史的視点からみた子どものウエルビーイング—、共同研究会「ウエルビーイングの思想とライフデザイン」、2010年10月9日、国立民俗学博物館

6、沢山美果子、子どもの「いのち」と女性の身体、2010年度立命館大学大学院先端総合学術研究科公募研究会「出生をめぐる倫理研究会」、共催：立命館大学グローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点、立命館大学生存学研究センター、2010年7月25日、立命館大学

〔図書〕(計3件)

1、沢山美果子、「乳」からみた近世社会の女の身体・子どものいのち、独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書、広和印刷株式会社、総ページ数、297頁

2、沢山美果子、近世人のライフコース、水本邦彦編『環境の日本史4』吉川弘文館2012 98-127

3、沢山美果子、近代家族と子育て、吉川弘文館、総ページ数、269頁

4、沢山美果子、「産婆」の登場—「産婆」とは誰か、服藤早苗、三成美穂編『ジェンダー史叢書 第10巻 権力と身体』明石書店、2011年、184-187

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沢山 美果子 (SAWAYAMA MIKAKO)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・客員研究員

研究者番号：10154155

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者